

小・中を貫く連続性をもった音楽指導の在り方

静岡市教育センター 長期研修員
静岡市立長田南中学校 南條 美穂

研究の趣旨

子どもの発達を視点に、カリキュラムの構成をとらえると、「連続性」と「適時性」を考えていくことが大切であると感じている。発達段階に応じた指導を行うとともに、9年間を通した連続性のある指導によって、中学校第2・3学年の目標、すなわち中学校卒業時にある姿「音や音楽への興味・関心を高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度」の質がより高いものになると考える。音楽指導の「適時性」と「連続性」を視点に授業実践を行う中で、音楽指導の在り方を探る。

1、テーマ設定の理由

(1) 新学習指導要領

①音楽科の目標（中学校卒業時にどんな生徒にしたいか）

新学習指導要領の中学校音楽科の目標は「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」である。「音楽を愛好する心情」について、「『音楽を愛好する心情』とは、生活に音楽を生かし、生涯にわたって音楽を愛好しようとする思いである。この思いは音楽のよさや美しさなどを感じ取ることによって形成される。」（中学校学習指導要領解説 音楽編 p 7）と解説されている。そして、それを身につけるために「音楽活動によって生まれる喜びや楽しさを実感したり、音楽の構造と曲想のかかわりや、背景となる風土や文化・歴史などを理解したりすることを通して、音楽について認識を深めていくことが音楽を愛好する心情を育てていく。」（中学校学習指導要領解説 音楽編 p 7）とあり、「音楽を愛好する心情」を育てるために、曲について学習することが大切であるとされている。また、小学校の音楽科の目標にも「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに」とあり、「音楽を愛好する心情を育てる」ことは、小学校から目標になっていることから、音楽科の大きな目標であると考えられる。そこで、小学校ではどのような姿が音楽を愛好する姿であるかとらえ、それをどのように伸ばしているのか理解することが大切であると考えた。また、それを理解して中学校の学習を計画していけば、中学校卒業時の「音楽を愛好する心情」に変化がでるのではないだろうかと考えた。

「音楽に対する感性」については、「このように音楽に対する感性を豊かにしていくことは、音楽科の特性にかかわる重要なねらいと言える。そのため、音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を感じ取りながら思考・判断し表現する一連の過程を大切にしたい指導が必要となる。」（中学校学習指導要領解説 音楽編 p 8）とある。音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を感じ取りながら思考・判断・表現する活動を授業に取り入れると、どのような効果があるのか調べてみたいと思った。

②学年の目標

新学習指導要領解説、学年の目標の中に「表現及び鑑賞の幅広い活動を継続的に深まりをもって行うことにより、音楽を愛好する心情や音楽に対する感性、音楽の諸能力が徐々に育まれていくという学習の特性を考慮し、それぞれの学年にふさわしい指導を工夫して目標の実現を目指す必要がある。」（中学校学習指導要領解説 音

楽編 p10) とある。それぞれの学年の目標を実現するためには、授業者はそれぞれの学年で指導すべきことを把握し、子どもの実態に合わせて授業を工夫していく必要があるということだと考えた。

(2) 静岡市の音楽教育

本年度当初の音楽主任会で、静岡市音楽科の平成22年度「課題と改善内容」が提示された。「言葉などを用いて表す主体的な活動を重視すること」、「小・中学校でそれぞれ扱う〔共通事項〕の内容をよく把握し指導すること」、「小学校1年生から中学校3年生までの9年間で、音楽科の目指す生徒に育てるということ意識して授業を行うこと」が挙げられた。

「言葉などを用いて表す主体的な活動」とは、「曲想や楽曲の構造など、音楽の面白さや美しさを感じ取ったり、作曲者の思いや意図、または時代背景などを感じ取ったりして、具体的な言葉などで表すことである」と説明があった。これまでの音楽の授業では歌ったり演奏したり、創作したり、鑑賞したりと授業の中で常に音楽に触れているという時間を多く取ってきた。その中で、言葉で説明する時間を大切にしようとするするとそれに多くの時間を取られてしまい、実際に音楽に触れる時間が大変少なくなってしまう。どのような授業であれば、静岡市音楽科で提示された言葉などを用いて表す主体的な活動になり、その活動は音楽教育にとってどのように有効であるのだろうか。

また主任会の中で、「小・中学校でそれぞれ扱う〔共通事項〕の内容をよく把握すること」と、「小学校1年生から中学校3年生までの9年間で、音楽科の目指す生徒に育てるということ意識して授業を行うということ」が示された。この9年間で音楽科の目指す生徒に育てるという課題について、私自身中学校の音楽しか指導した経験がなく、小学校でどのような授業が行われているのか、小学校でどんな力を身に付けているのか意識したことがなかったことに気付いた。

(3) 自己課題より

これまでの自分の授業を振り返ると、よりよく表現するために、授業においては、曲想や楽曲の構造など音楽の面白さや美しさを感じ取る場面よりも、技能を高める場面が多かったように感じる。しかし、技能面では何年生で何をできるようにすることが目標なのかを、説明することはなかなか難しい。

また、合唱曲を選ぶときは、中学校での発達段階に気を配ることはあっても、小学校においてどのような発達段階でどのような学習を積み重ねてきたかは考えたことはなかった。中学1年生に合唱曲を提示すると、「その曲は小学校で歌ったことがある。」という反応が返ってくることもある。その曲が、中学で学習する曲の方が難易度が高い場合もあるし、同じ編曲の場合もある。中学1年生の発達段階に応じて選曲したつもりが、同じ曲であるならば、小学校の選曲が発達段階にあっていないか、私の発達段階の認識がずれていることになる。

「発達段階に応じた選曲」が必要だと考えるが、それは何を基準にしたらよいのだろうか。これまでも「この曲は小学生には早い」と感じたことがあったが、それは経験の中から得たいわゆる「直感」のようなものである。このように、発達段階に合わせた教材の選び方は曖昧であった。

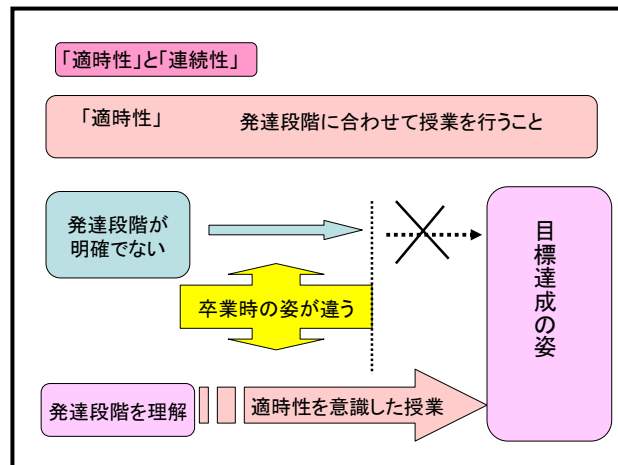
これは、それぞれの学年の到達目標を意識していないことから生じている。こうした選曲は、全校合唱を考える上でも同様である。小学校においても中学校においても、全校合唱を取り入れている学校が多くある。これまで勤務していた学校でも、毎年「今

年の歌」を決め、全校合唱を行ってきた。これまでは、中学校1年生でも歌える曲で、練習時間が短くてすむようなあまり難しくない曲の中から選ぶようにしてきたが、この全校合唱曲も各学年の発達段階に応じて表れが違うはずで、その発達段階に応じた指導ができるような選曲が必要なのではないだろうか。

このようなことから自己課題として、教材選び、単元構成を考える上で、発達段階に応じた目標を明確にもつことが必要であるととらえた。

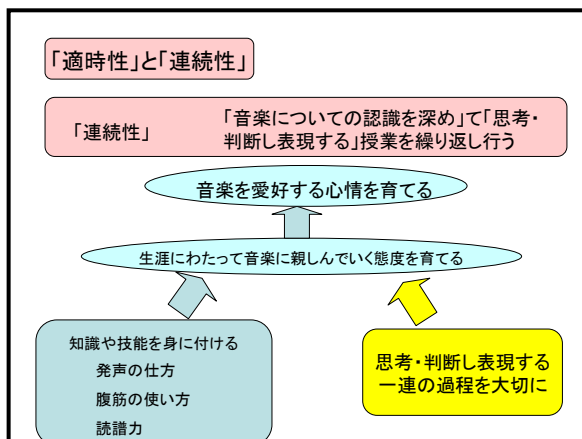
(4) 指導の「適時性」と「連続性」

「発達段階に応じた目標を明確にもっていない」と、各発達段階に合わせた「それぞれの学年にふさわしい指導を工夫して目標の実現」を目指した授業を行うことができない。「それぞれの学年にふさわしい指導を工夫して目標の実現」を目指すためには、それぞれの学年の発達段階を理解し、その目標がどのように違っていくのかを理解することが大切である。そして、各発達段階に合わ



せた目標を設定し、またその発達段階に合わせた目標達成のための手だてを打てれば、「それぞれの学年にふさわしい指導」ができると考えた。教師が発達段階に合わせて授業を行うことを、指導の「適時性」ととらえると、それぞれの学年で「適時性」のある授業を積み重ねることにより、中学校卒業時の姿が変わってくるのである。

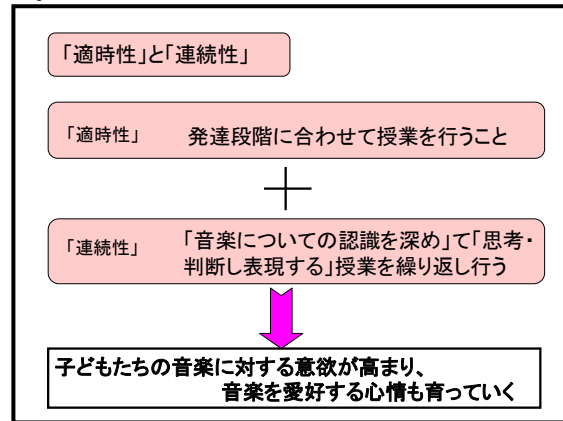
これまで私は、中学校で音楽を教えながら「中学校を卒業してからも趣味で音楽を演奏したり鑑賞したりするときに、困らないような知識や技能を身に付けさせたい」と考えてきた。これが、中学校第2・3学年の目標である「生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」につながるものだと考えていた。そのために、歌唱では楽譜を見ながら歌わせ、楽譜の意味がなんとなくでも理解できるようにし、私が目指す歌唱に近づくよう、発声の仕方、腹筋の使い方など技能を身につけることを大切に考えてきた。また、これらの授業を通して「美しい歌声で歌えた」、「強弱の変化があった」など、音楽表現を楽しむ生徒を育てれば、音楽に対する感性も高まるのではないかと考えていた。しかし新学習指導要領



解説では、私が今まで考えていたことと同じ楽しさ、つまり「音楽活動によって生まれる喜びや楽しさを実感」することだけでなく、「音楽の構造と曲想のかかわりや、背景となる風土や文化・歴史などを理解したりすることを通して、音楽について認識を深めていくこと」で「愛好する心情」が育つとしている。また、それとともに「音楽に対する感性」を高めるために、「思考・判断し表現する一連の過程を大切にした指導」の必要性が示されている。今までは、

音楽活動の時間を多く取っていくことが「音楽を愛好する心情」と「音楽に対する感性」を高める上で大切だと、私は思っていた。心情を深くとらえ、生徒同士で練り合わせる活動を授業の中心にすると、週に1時間しかない音楽の授業では、音楽活動の時間が確保されないのではないかと考え、「思考・判断し表現する」授業を重要視していなかったように感じる。しかし新学習指導要領では、音楽科の目標達成のためには、「音楽について認識を深め」て「思考・判断し表現する」授業を繰り返し行っていくことが大切とされている。これが音楽指導の「連続性」であると考えられる。それでは、このような指導を続けることは、今までの指導を繰り返したときとは、身に付く力はどのように変わってくるのだろうか。

このように新学習指導要領を読み解く中で、指導には「適時性」と「連続性」があることが見えた。「適時性」にあった目標を設定し、「適時性」にあった目標達成のための手だてを考え、「連続性」のある授業を繰り返すことで、子どもたちの音楽に対する意欲が高まり、音楽を愛好する心情も育っていくのではないかと考え、「小・中を貫く連続性をもった音楽指導の在り方」を研究テーマとした。



2、仮説

小学校1年生から中学校3年生までの発達段階にあった適切な目標設定、授業過程（適時性）を計画し、思考・判断を伴う授業を繰り返すこと（連続性）で、音楽に対する意欲が高まり、音楽を愛好する子どもを育てることができるのではないかと考え、

3、仮説検証にむけての調査活動

(1) 文献で調べる

①音楽教育の「適時性」

ア、新学習指導要領より

新学習指導要領を各学年の目標が明確になるように、学年毎まとめてみた。それぞれの学年で身につけたい力、それを身につけるためにどのような内容を学習するのかという具体が見えるのではないかと考え、学年ごとにそれぞれの領域で何をめざすのか探った。

例として小学校第1・2学年の一部を示す。

	歌唱	器楽	音楽づくり	鑑賞
ア	範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりすること。	範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏すること。	声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること。	楽曲の気分を感じ取って聴くこと。
イ	歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって歌うこと。	楽曲の気分を感じ取り、思いをもって演奏すること。	音を音楽にしていくことを楽しみながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること。	音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取って聴くこと。

この中で分かることは、小学校1・2年生はどの領域においても、音楽を聴く耳を育てることが重視されていることである。音楽は相手と合わせなければならぬことが多いので、正しい音程やリズムが分からないと、音楽の楽しさを十分に感じ取れなくなってしまう。だから、正しい音程やリズムなどを身につけさせる必要がある。そのため、小学校1・2年生では周りの音をよく聴いて、歌ったり演奏したりする活動を大切に、音程感、リズム感、フレーズ感を育てていかなければならないと分かった。

また、小学校1・2年生では、歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞のすべての領域において、教材曲の気分を感じとることができるようにするとともに、その感じがどの要素からきているか表現する手掛かりを音楽の中に求めていくようにさせていかなければならないということも分かった。

さらに、小学校1・2年生の学習内容として「楽曲の気分を全体的に感じ取る。体全体で感じ取る」活動が適時性であることも分かった。このような小学校1・2年生に適した活動の中で、聴く力、音程感、リズム感、フレーズ感、そして曲の雰囲気をもとの音楽を形づくっている要素からきているか考える習慣を身につけることが、小学校1・2年生の発達段階にふさわしい目標であると理解した。

同様の分析を、他の学年でも行った。

イ、先行研究より

より高い音楽性を高め、感性のある生徒の育成に努めた小学校の実践をまとめた「音楽教育の系統性に関する提言 ～新入生から卒業生になる8年～」(伊東玲著 レーヴック)に出会った。その中には、それぞれの学年で何ができなければいけないか、何ができればそのような力が身につくか、新学習指導要領の具体が書かれていた。

また、新学習指導要領をどのようにとらえるか書かれた「小学校 新学習指導要領の展開 音楽科編」(明治図書)からも、より具体が見えてこないか探ってみた。

これらの文献のポイントを私なりにとらえ、まとめてみた。

この活動の中で大変驚いたことは、次の内容が小学校卒業するまでに体験しておくべきこととしてあげられていたことである。なぜなら、これらの内容は私が中学校で指導することと考え、授業の中で繰り返し指導してきた内容とほぼ同じだったのだ。

音楽はスパイラルに指導していくので、小学校でやったからといって中学校で指導しないということはないが、前述したように適時性があるわけで、今までの授業の中には適時性が欠けていたということになる。

小学校の歌唱活動において、押しつけや訓練的な指導にならないように配慮しながら、小学校卒業までに教師の指導によって身につけていなければならない技能や知識は、おおむね次のようなものではないだろうか。

- ・歌い方(頭声的な発声で合唱曲を歌うこと、民謡などでは声を使い分けて胸声を音楽的に用いて歌うこと、鼻濁音やカ行・サ行・ハ行の発音の仕方、歌詞の扱い方、カンニングブレスやブレスをしない休符の扱い方、呼吸の方法、姿勢、声の方向、共鳴のポイント、顔の表情のコントロール、声の響かせ方、など)
- ・楽譜に関すること(学習指導要領に示された音符、休符、記号など)
- ・変声期中の歌い方と変声期後の歌い方

(小学校 新学習指導要領の展開 音楽科編 明治図書 p55より)

次に、小学校卒業までに歌唱の学習で体験しておくべきことは次のようなことではないだろうか。

- ・強弱、速度、音の重なり、バランス、音色など、音楽を形づくっている要素を操作して歌ったら音楽が豊かになった、美しくなったという体験。特に、高学年では自分の力で音楽を形づくっている要素を自由に操作する体験
- ・聴衆と音楽のすばらしさを共有し、歌う喜びを味わうこと

(小学校 新学習指導要領の展開 音楽科編 明治図書 p55より)

では、中学校での適時性は何なのであろうか。「音楽教育の系統性に関する提言～新入生から卒業生になる8年～」(伊東玲 著 レーヴック p30)によると、「中学生にはその精神面の発達に合わせた音楽の魅力を提示することが必要」ということである。そして、その授業とは、以下のように説明している。

そのような時期であるからこそ、どうしてそのように感じるのか、どうしてそのように聴こえるのか、どうしてそのような音が生まれるのか、どうしてそこで再びこの旋律が戻るのか、どうしてこの楽器が古来より日本人には好まれてきたのか、どうしてその国ではそのような音楽が人々に愛好されるのか、というように、音の現象として表れていることと、それを受け取る個々の内面を、生徒自身が結び付けて考えるというような授業であって欲しいと思います。

どうして、とか、何が、とかいうような音楽表現に関する問いを、その生徒の成長過程にある精神にぶつけて欲しいのです。

(「音楽教育の系統性に関する提言」伊東玲 著 レーヴック p30より)

このように、中学生の授業は曲を表現するための技能を教えることに重点を置くのではなく、中学生だからこそ曲に対する思いを持ちそれを演奏につなげるような授業を組み立てていかなければならないということが分かった。

②音楽教育の「連続性」

ア、新学習指導要領より

現行の学習指導要領では、指導内容が「A表現」として、ア～ク、「B鑑賞」としてア～エと指導事項が示されているが、新学習指導要領では、「A 表現」が「(1)歌唱」「(2)器楽」「(3)音楽づくり(中学校では創作)」としそれぞれ指導事項が示されている。そして、現行の学習指導要領は、内容として小学校と中学校では記述の仕方が違っているが、新学習指導要領では小・中で記述の仕方が統一されており、これが新学習指導要領の大きな特徴の一つである。

そこで、これをまとめることで、小・中を通してどの領域でどんな思考・判断を繰り返していくのかが明確になってくるのではないかと考え、まとめてみた。

例としてA表現(1)歌唱の一部を示す。

	小学校第1・2学年	小学校第3・4学年	小学校第5・6学年	中学校第1学年	中学校第2・3学年
ア	範唱を聴いたり歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりすること。	範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして歌うこと。	範唱を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌うこと。		

イ 中 学 は ア	歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって歌うこと。	歌詞の内容・曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと。	歌詞の内容、曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと。	歌詞の内容や曲想を感じ取り、表現を工夫して歌うこと。	歌詞の内容や曲想を味わい、曲にふさわしい表現を工夫して歌うこと。
-----------------------	---	-------------------------------------	------------------------------------	----------------------------	----------------------------------

小学校1・2年生では楽曲の気分を表現し、小学校3・4年生では自分にとってふさわしい表現を目指して思考・判断し、小学校5・6年生は自分の明確な考えや願いをもって歌唱の活動に取り組み自分にとって価値のある新しい歌唱の表現をつくり出し、中学校1年生では要素の働かせ方を試行錯誤してよりよい表現を目指し、中学校2・3年生では多くの人が共通に感じ取れるような表現を目指して思考・判断を繰り返すことが分かる。

このように、同じ領域の中で発達段階に合わせて思考・判断を繰り返し、どのような深まりを目指していくかがわかりやすいように構成されていた。新学習指導要領は指導の「連続性」を重視しているものであることが理解できた。

また、新学習指導要領では新しい領域や活動分野としてではなく、表現及び鑑賞の全ての活動（歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞）において、共通に指導する内容として〔共通事項〕が示された。新学習指導要領解説に出てくる「音楽を形づくっている要素」は、この〔共通事項〕(1)アに示されている。そしてこれが、表現及び鑑賞の能力を育成する上で共通に必要なものであり、思考・判断する中で視点となるものだと考える。

〔共通事項〕(1)ア(ア)の要素と(イ)の音楽の仕組みをまとめた表を示す。

	小学校第1・2学年	小学校第3・4学年	小学校第5・6学年	中学校第1学年	中学校第2・3学年
ア (ア)	音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズ	音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、音階や調、拍の流れやフレーズ	音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和声の響き、音階や調、拍の流れやフレーズ	音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成	などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ること
(イ)	反復、問いと答え	反復、問いと答え、変化	反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係		

強弱、速度、リズム、旋律、音色など小学校1年生から中学校3年生まで扱われる要素があるように、音楽科の特性としてそれを繰り返し学習していくことが要求されていることも表から読み取れた。

③音楽教育での思考・判断・表現

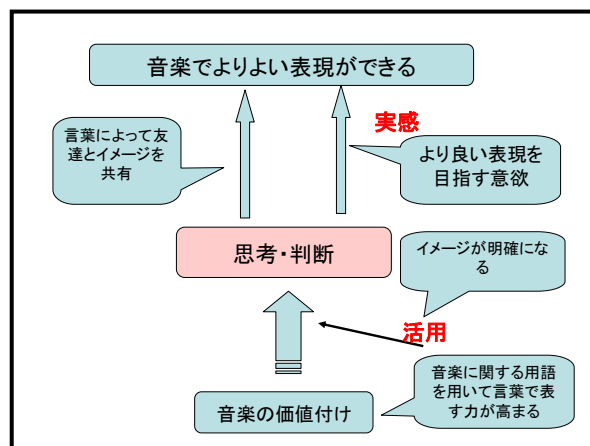
新学習指導要領でも「生きる力」の育成を目指している。「生きる力」は確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和である。中教審答申の中で改善の基本方針として「音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむことなどを重視する。」(平成20年1月 p94)とあり、この力が音楽科で目指す「生きる力」であろう。

また、中教審答申には「音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・

判断する力の育成を一層重視する。」(平成 20 年 1 月 p 94) とある。課題として「感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスを働かせる力、生涯にわたって音楽に親しみ、音楽文化のよさを味わったり、生活や社会に生かしたり豊かにしたりする態度の育成」(中教審答申 平成 20 年 1 月 p 94) が求められている。このように、「生きる力」を高めるために、思考・判断する力の育成を目指すことが示されている。

音楽の授業の中で思考・判断するとはどのようなことであろうか。中等教育資料(平成 22 年 9 月号 初等中等教育局教育課程課 教科調査官 大熊信彦 著)の「音楽教育における学力をどうとらえるか」の中で、音楽の思考は「音楽を形づくっている要素の働きなどをいろいろと考えながら音楽表現を試すこと」と解説されている。例えば、「強弱でこの雰囲気かわるから、クレッシェンドはこんな感じがいいかな」と考え、実際に歌ってみて自分の表現が適しているかどうか吟味してみるような活動のことだと解釈した。そして、判断は「このように音楽で表してはどうかといったように思いや意図をもつこと」とあった。これは「今のクレッシェンドはまだ、広がりがないからもう少し弱い部分を多くしてみたらどうだろうか」と、よりよい表現を求め自分の思いをもつことだととらえた。そしてここでいう表現とは、「思考・判断していることについて言葉など(発言、記述などの言語活動を中心としながらも必要に応じて、音、楽譜、身体なども含めて)で表す」と解説されていた。

音楽の授業の中で、音楽を聴いて価値などを考えていく学習過程を通して、生徒が自分なりの表現意図や価値について思考・判断し、音楽で表したいことを音楽に関する用語などを用いて言葉で述べることで、言葉で表すことのできる力が身に付いていく。言葉で表す力が身に付けば、それによって自らの思考を深めたり判断を明確にしたりすることができる。言葉で表すことによって、音楽



音楽として表現したいイメージが明確化され、よりよい歌唱表現や演奏表現を目指す意欲につながるのではないだろうか。また、音楽として表現できたことを言葉で説明することで、自分の実感として心に残っていくであろう。

一方、音楽で表現したいことを言葉で表すことは、自分と友達とで思いやイメージが共有されるようになる。自分とは違う価値に出会ったり、表現を聴き合って評価し合ったりすることができるため、より深い追求につながっていくことが分かった。

(2) 静岡市の音楽授業

①実践より学ぶ

子どもたちの実態を把握したいと考え、静岡市教育委員会学校教育課の計画訪問時や、静岡市教育センターの研修、その他の研究授業などに参加させていただき、静岡市の音楽の授業を参観させていただいた。この活動の中で学んだことは、小学校の先生方は思いをもたせ追求していく場面を多く取り、子どもたちが自分の思い

を音楽で表現しようと意欲的に取り組むことができるようにしているということであった。

今までの自分の授業を振り返ると、一斉授業において曲に対する思いをよりよく伝わるための技能を教えていることが多かったように思う。しかし、これは私自身の曲に対する思いを表現するための手立てを教えていただけであった。生徒たちはどれだけの思いをもって表現していただろうか。また、どんな表現方法をとったか理解し説明できる生徒はどれだけいただろうか。

小学校の先生方が、授業において思いをもたせ表現を工夫する授業を行っているのなら、中学校の授業における同様の場面設定は、思いを表現したいという意欲をさらに引き出すことができるのではないかと感じた。

(3) 知的な面での発達段階・思考の発達段階

その学年にあった目標設定をし、単元構成を考えると、その他の発達段階も理解することが、よりよい手だてにつながるのではないかと考え、音楽以外の発達段階も調べてみることにした。

中教審答申（平成20年1月 p48）の中で、知的な面での発達段階を以下のよう

小学校 低学年	幼児期的な特性を残しながらも、言葉と認識の力が広がり、ある程度、時間と空間を越えた見通しがてるようになる。例えば、算数の時間なら、数の問題に集中できるというように、数や言葉についての発達が進み、半具体物（タイルなど）を使って抽象的に考えていくことも多少は可能になる。
小学校 中学年 以降	幼児期を離れ、物事をある程度対象化して認識することが可能となっていく。対象との間に距離をとって分析できるようになり、知的な活動も分化した追求が可能になる。自分のことも距離をもってとらえられるようになることから、自分と対象とのかかわりが新たな意味をもつようになる。
中学生	思春期に入り、親や周りの友達と異なる自分独自の内面の世界があることに気付いていく。また、内面の世界が周りの友達にもあることに気づき、友人との関係が自分に意味を与えてくれると感じる。さらに、未熟ながらも大人に近い心身の力をもつようになる。大人の社会とかかわる中で、大人もそれぞれ自分の世界をもちつつ、社会で責任を果たしていることへの気づきへと広がっていく。

また、思考・判断し表現する授業を行うにあたり、各学年において思考の仕方にも特徴があるのではないかと考え、ピアジェの思考の発達段階も参考にしてみた。

操作的段階・具体的 操作期 (7～12歳頃まで)	論理的に物事を考えることができるようになるが、具体的に比較したり確認したりすることがないと論理的思考を行うことはできない。児童期の段階では、考え方としては完全には自己中心性を抜けきれていない。
操作的段階・形式的 操作期 (12歳以降)	思考の仕方はほぼ成人と同一になる。また、児童期の段階よりも具体物がなくても、自分でイメージをして、論理的思考を行えるようになる。また、自分だけの視点でなく他者からの視点に立っても思考することができるようになる。

このように、小学校ではできるだけ具体の中で思考していく過程を組む必要があること、中学校では具体物がなくても論理的に思考ができるため、自分のもっている価値を出し合い、新しい価値を求めていく過程が大切であることを確認できた。

(4) 調査活動のまとめ

新学習指導要領解説編とその他の文献（※1）で適時性を探ってくる中で、各発達段階における目標が見えてきた。歌唱においては、小学校1・2年生で音程感やリズム感、フレーズ感を身に付け、小学校3・4年生になったら副次的な旋律など自分と友達の歌声を調和することができるようにし、小学校5・6年生で豊かな響きを求めることができるようにし、中学校1年生で曲にあった歌い方があることを理解して、中学校2・3年生でそれを生かして表現する力を身に付ける。

このようにその学年に合った目標を達成していくことによって、次の発達段階で思考・判断する力や、それによって表現したいと考えたことを表現する力も高まっていく。だからこそ授業者は、発達段階にふさわしい目標をしっかりと定めて授業に臨まなければならないことが分かった。

適時性と連続性、知的な面での発達、思考の発達、これらを理解した上で、教科書に載っている教材を歌唱領域で扱うと、適時性の中でどのような連続性があるのか考え、まとめたものが表「歌唱指導でさぐる適時性と連続性」である。どの教材も、曲に対する思いをもたせ、どのように表現したらよいか音楽を形づくっている要素を工夫していくように作成した。また、小学校では歌い比べてみるなど、具体的に示しながら思考・判断するなど、思考の発達段階も考慮した。そして、音と言葉がつながり実感を伴って子どもたちは理解することを積み重ねていくようにした。中学校では、それぞれがもつ自分の表現と他の人の表現が結び合い、表現がより深化していくように作成した。また備考欄には、どのような体験を積み重ねていくのかを \square で囲むとともに、展開案と新学習指導要領解説とのかかわりを記述した。

歌唱指導でさぐる適時性と連続性

南條作成

教材	展開案	共通事項	技能知識	備考 (頁)は学習指導要領解説とのかかわりを示す
小学1年	うみ ○海の写真から、海ってどんなところかな。 ・広い、大きい船が浮かんでいる ・ざぶーんざぶーんと波がある、 ○大きな船がゆっくり進む「うみ」を歌ってみよう。 速さを変えて歌ってみる。 ○どの速さがいいかな？ ゆっくりな方がいい。	速さ	・聴唱の能力	・表現を工夫する手がかりを音楽の中に求める習慣を身につける。(小p23) \square ゆっくりな音楽で、大きい感じを表現できたという体験 低学年の目標(2) 「基礎的な表現の能力」 (小p21)
小学2年	春がきた ○春を色で表してみよう。 ・ピンク、黄緑、黄色 ○優しい色だね。「春が来た」もやさしく歌おう。 ○どの声がいいかな？グループ毎歌ってみる。 ・優しい声で歌っている友達をみつける ○元気な声とやさしい声があるんだね。優しい声で歌うと、音楽も優しくなるね。	音色	・正しい音程感覚	・聴唱の能力。 ・音楽を形づくっている要素に対する感受性と思いをもった表現。 ・それらに支えられた表現の技能。 \square 優しい声で歌うと、音楽も優しく表現できたという体験

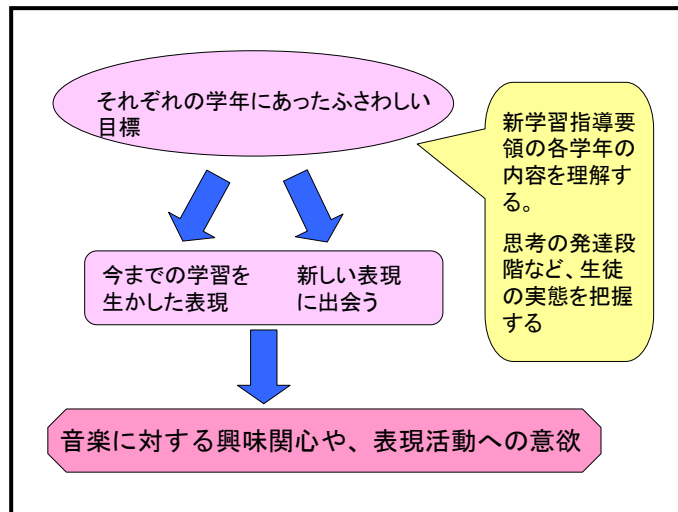
小学3年	ふじ山	<p>○「ふじ山」の中のふじ山を探そう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽譜のなかで、一番大きな山は「雷様を下に聞く、ふじは日本一の山」 <p>○「ふじ山」の富士山が伝わるように「強弱」をつけて歌おう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・だんだん強く歌ってみよう。 ・終わりはだんだん弱くしないと富士山って感じにならないね。 <p>○だんだん強くして、だんだん弱くすることで、高い山が表現できたね。</p>	強弱	<ul style="list-style-type: none"> ・ハ長調の視聴 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の流れを感じとりながら楽しく読譜する。(小p37) ・グループの練習の仕方を学ぶ。 <p>曲の盛り上がりは強弱を工夫することで表現できたという体験</p>
小学4年	もみじ	<p>○CDのようにきれいなハーモニーをつくろう。</p> <p>○友達の声と、自分の声をきれいに重ねてみよう。(グループ練習発表会)</p> <p>○きれいに重なるとどんな感じがした？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・澄んだ感じ ・鮮やかな感じ ・盛り上がった感じ 	音の重なり	<ul style="list-style-type: none"> ・副次的な旋律の響きを聴きながら適切な歌声で歌う能力 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌声が一つになったり、重なり合ってきたり、響き合ったりすることに気付かせる。(小p39) ・楽しく無理なく、声を合わせて歌う活動(小p39) <p>友達と声を重ねることの楽しさを体験</p> <p>音が重なると、ステキな雰囲気表現できたという体験。</p>
小学5年	赤とんぼ	<p>○気持ちを込めて歌詞を朗読してみよう</p> <p>○朗読したように歌ってみよう。</p> <p>○どんな感じがしましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・だんだん強くなるころは、昔を思い出して気持ちが高まってくる感じがした。 ・だんだん弱くなって、寂しくなった。 <p>○強弱の工夫で、気持ちも表現できるんだね。</p>	強弱	<ul style="list-style-type: none"> ・強弱記号 ・響きのある声で歌う 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を形づくっている要素を生かした表現の仕方について考え、試行錯誤を重ね、思いや意図をもって表現方法を考える活動。(小p54) <p>思いや意図をもって表現する方法を考えてみる体験</p> <p>気持ちの変化を強弱で表すことができるという体験</p>
小学6年	われは海の子	<p>○遠くまで続く浜辺の様子を表現してみよう。(自分たちの録音を聴いて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽が切れてつながっている感じがしない。 <p>○どのように歌ったらいいかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切れないように歌う。 ・声の感じがずっと同じように歌う。 ・一つの山のように強弱をつける。 	フレーズ音色強弱	<ul style="list-style-type: none"> ・自然で無理のない響きのある歌い方 ・息継ぎの仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・強弱記号の復習 <p>フレーズを感じて歌うことの体験</p>

<p>中学1年</p>	<p>夏の思い出</p>	<p>○「水芭蕉の花が咲いている」は、どんな場面かな。 ・花をみて感動している。 ・静かな風景の中で心で感じている。 ・そっと語りかけている。 ○情景を歌で表現してみよう。(グループ練習) ・「咲いている」の pp はささやくように。 ・響く声がいい。 ・八分休符をしっかりとる。 ○各グループでどんな工夫をしたか発表しよう。</p>	<p>強弱 音色 リズム</p>	<p>・歌詞の内容や曲想を感じ取り表現を工夫して歌う能力 ・言葉の特性を生かして歌う</p>	<p>・直感的に感じとった際に、音楽の構造とのかかわりにおいて再度とらえ直し、生徒の感じ取った内容が質的に深まる活動。 (中p25) ・要素の働かせ方を試行錯誤し、よりよい表現の方法を見いだして歌う。(中p25) ・曲想を感じ取る活動と、表現を工夫して歌う活動を一体的に行う。(中p26)</p> <p>そのように歌うための呼吸法など身体の使い方をどのようにすればよいかといった技能の習得</p> <p>曲想にあったppの表現方法を体験(子音の扱い方の体験) 休符を意識した表現の体験</p>
<p>中学2年</p>	<p>浜辺の歌</p>	<p>○同じメロディーに p と mp があるのはなぜだろう。 ・静かに過去を思い出しているから ・次の感情の高まりを印象づけるため。 ○pを効果的に歌ってみよう。 ○自分たちの歌を録音し、評価してみよう。</p>	<p>強弱</p>	<p>・曲にふさわしい表現を工夫して歌う能力</p>	<p>・多くの人が共通に感じ取れるような表現をめざす。 (中 p43)</p> <p>小学校での経験と、中学校1年での経験を生かし、より表現を深める体験</p> <p>・表現意図を、互いに確認し合うことが必要。(中p45) ・話し合いの場面を設けて生徒同士で音楽表現をつくりあげていく過程や、表現を聴き合い客観的にとらえ、それをさらなる工夫につなげていく過程などを重視した指導。(中 p45)</p>
<p>中学3年</p>	<p>花</p>	<p>○歌詞に歌われている情景を知ろう。 (写真や絵) ○春の美しさを二重唱で表現してみよう。 ・旋律と副旋律の音色を合わせよう。 ・私の音が動いているときは、少し強めに出そう。 ・相手の音を聴いて歌おう。 ○発表会をして、お互いのよかった点を見つけよう。 (どの要素が、どのようになっていて、どんな感じが出たか評価し合う。)</p>	<p>音色 テクスチャ</p>	<p>・声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して表現を工夫しながら合わせて歌う能力</p>	<p>どの要素を、どう工夫したいために、息や発音、呼吸などをどうすることによって表現できたという体験</p>

4、仮説検証のための手だて

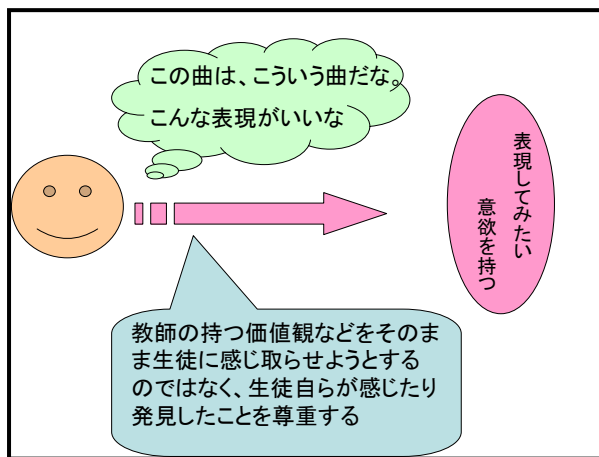
(1) 発達段階に合わせた目標の設定（「適時性」）

音楽指導の「適時性」を考えると、それぞれの学年にふさわしい目標を設定することが大切である。曲をただ歌えるようになった、演奏できるようになったということが目標ではなく、その曲で何を身に付けさせたいかということを確認することが必要である。それぞれの学年にふさわしい目標を設定するためには、新学習指導要領の各学年の内容を理解すること、思考の発達段階など生徒の実態を把握することが大切であると考えた。



そこから導き出した「適時性」のある目標を設定することによって、子どもたちは今まで学習してきたことを生かして表現してみたり、新しい表現に出会ったりすることができる。このような学習は、音楽に対する興味関心や表現活動への意欲を高め、音楽を愛好する心情を育てることにつながっていくと考える。また、「適時性」のある目標であれば達成感も高まり、次の教材に対する意欲もわいてくるであろう。

(2) 曲に対する思いをもたせる場面の設定（「連続性」）



音楽は思いを表現する教科である。表現する前に自分の思いがあり、またその表現によって新たな思いが生まれてくる。このように考え、曲に対する思いをもたせることが有効であると考えた。そして、曲に対する思いをもたせることで、「この曲を表現したい」という学習意欲が生徒の中にわいてくるはずである。表現したいという意欲は、その後の学習に大きくかかわっていく。そのためにも、曲に対する思いをもたせることは、単元展開において大きなポイントとなる。

新学習指導要領の中学校1年生の目標解説の中に「教師のもつ価値観などをそのまま生徒に感じ取らせようとするのではなく、生徒自らが感じたり発見したりしたことを尊重し、そのことをよりよい表現に結び付けていくように指導することが大切である。」（中学校学習指導要領解説 音楽編 p23）とある。これは教師の価値観を表現するために技能を教えていくのではなく、生徒自らが思いをもって表現したいと意欲をもたせることが大切であることを示している。

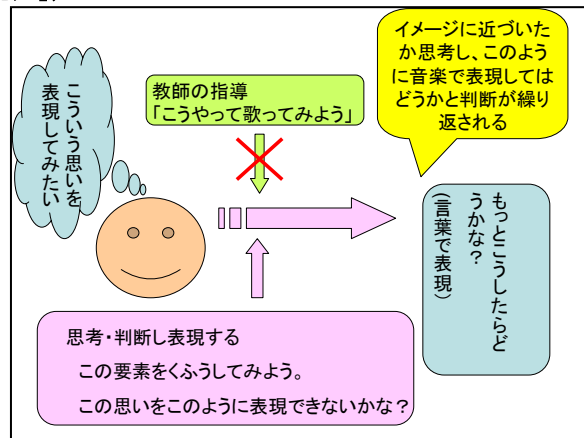
曲に対する思いをどのようにもたせるかは、教材によって、あるいは地域によって、学年によってさまざまな方法が考えられるが、作曲者がこの曲に込めた思いを知ること、その一つであると考え。実際、新学習指導要領では「歌詞や楽曲の成立背景、作詞者や作曲者についても、必要に応じて学習することが望まれる。」（中学校学習指

導要領解説 音楽編 p25)と記されており、表現を深めていく学習をする場面ではどんな曲か知ることにも必要である。

検証のための授業では、「COSMOS」(合唱曲)を教材とした。「COSMOS」について、作曲家自身がホームページ上にこの曲に込めた思いを書いている。そこで、その作者の言葉を提示することで作者の思いを知り、歌詞を深く読み解く中で、どのようなことを表現している曲なのか想像させ、思いを深めさせたい。そして、強弱記号や曲の構成に着目させ、音楽を形づくっている要素をどのようにして作曲家は思いを表現しようとしていたか、作曲家の意図を想像し、作曲家の意図が友達に伝わるような表現を目指そうと意欲をもたせたい。

(3) 思考、判断する場面の設定(「連続性」)

曲に対する思いをもたせたら、それを表現につなげることが必要となる。曲に対する思いをもった生徒に、例えば教師は強弱を工夫して表現したいと考え「こういう思いだから、こう歌ってみよう」と指導をすると、音色や速度など他の音楽を形づくっている要素で表現してみたい生徒や、教師の思い描いた表現とは違う表現を目指したい生徒にとっては、自分の思いが表現につながらないため、学習意欲は向上していかないであろう。だからこそ、ここで思考・判断する場面の設定が必要になってくると考えた。



このような表現をしたいという思いをもたせ、グループ活動をさせると、音楽を形づくっている要素を工夫し、思いが表現できたか思考する。そして、さらにこのように音楽で表現してはどうかと判断する。この操作が繰り返されるのではないかと考えた。

このような表現をしたいという思いをもたせ、グループ活動をさせると、音楽を形づくっている要素を工夫し、思いが表現できたか思考する。そして、さらにこのように音楽で表現してはどうかと判断する。この操作が繰り返されるのではないかと考えた。

5、検証計画と指導の実際

(1) 検証計画

①検証の視点

発達段階に適した目標、手だてを打ち、児童・生徒が思考・判断する活動を積極的に取り入れることで、どのような意欲が高まり、表現がどのように深まったかを調べる。

②検証の方法

ア、対象

小学校6年生：静岡市立清水岡小学校 第6学年(授業者 松永友里子教諭)

中学校2年生：静岡市立長田南中学校 第2学年

同じ学区の児童・生徒の実態を知るために、
小学校6年生：静岡市立長田東小学校
中学校3年生：静岡市立清水第二中学校
にご協力いただいた。

イ、題材名

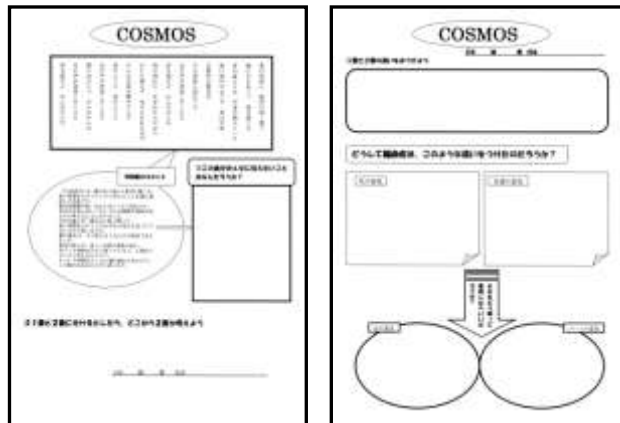
「COSMOS」 小学校6年生 ミマス作詞・作曲 富澤 裕編曲
 同声二部合唱（音楽之友社）
 中学校2年生 ミマス作詞・作曲 富澤 裕編曲
 混声三部合唱（教育芸術社）

ウ、実施日

- ・ 9月下旬～10月中旬 静岡市立長田南中学校
 全7クラス×2時間（単元の中の2時間で検証）
- ・ 12月上旬 静岡市立長田東小学校
 1クラス×2時間（単元の中の2時間で検証）
- ・ 12月上旬 静岡市立清水岡小学校
 1クラス×2時間（単元の中の2時間で検証）

エ、検証資料

- ・ 学習カード
- ・ 事後アンケート
- ・ 授業記録



(2) 指導の実際

①「適時性」のとらえ方【検証の手だて（1）】

	目 標	目標達成のための手だて
小学校6年生	<ul style="list-style-type: none"> ・ どのような表現をしたいか思いをもち、音楽を形づくっている要素をどのようにしたらそれが表現できるか、思いをもって追求することができる。 ・ 自分が追求したい要素とは違う要素を工夫することによっても、表現できることを感じ取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一つの要素で何通りか実際に歌ってみる中で、要素をどのようにするとどんな感じになるか、具体の中から考えさせる。 ・ 音楽を形づくっている要素をどのように工夫したら、思いに近い表現ができたとき自分で判断した体験をする。
中学校2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作曲者の意図を感じ取り、音楽を形づくっている要素を操作してそれにふさわしい表現の工夫をすることができる。 ・ 思いを表現するために、要素をどのようにしたいと考えるだけでなく、どのように歌ったらそれが表現できたか感じ取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 曲に対する作曲者の思いから、なぜその部分に記号が付けられたのか、このような構成になっているのかを考え、どのようにすれば曲にふさわしい表現になるか工夫する。 ・ パート毎の練習によって、自分の工夫しようとしている要素だけでなく、他の人が工夫しようとしている要素にも着目し、より深い表現をめざす。

②小学校6年生
ア、単元構成

時間	目 標	教 師 の 働 き か け	留 意 点
第 1 ・ 2 時	感じたことや気付いたことを自由に書いたり、話し合ったりできる。	<ul style="list-style-type: none"> ・全員でソプラノパートを歌おう。 ・全員でアルトパートを歌おう。 ・この曲を聴いたり、歌ったりするなかで、感じたことや気付いたこと、疑問に思ったりしたことを書いてみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パート毎、正しい音程で歌えるように練習する。
第 3 時	「COSMOS」の作曲された背景や作者の思いを理解し、曲のもつ美しさや良さを味わうことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・範唱を聴きながら、作曲者からのメッセージを読んでみよう。 ・「COSMOS」がみんなに伝えたいことは何だろう。 ・「COSMOS」が伝えたいことは何だと考えたか、発表しあおう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜ではなく、歌詞を見ながら範唱を聴き、歌詞に込められた作者の思いを受け止められるようにする。 ・作者のメッセージを紹介し、歌詞に込められた作者の思いを想像する手だてとする。
第 4 ・ 5 時	強弱、音色を意識し、それらの要素を生かしてふさわしい表現を工夫することができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・1番の歌詞の意味が伝わるようにするには、どのように歌ったらいいだろう。 ・強弱、音色、ハーモニーはどのように工夫したらいいかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第2時にあげられた諸要素の中で、強弱、音色、ハーモニーに着目させる。 ・それぞれの要素を意識して表現した時にどんな効果があるのかを感想を出し合う。
第 6 時	どの部分から、どんな思いが感じられるか、音楽を形づくっている要素や構造などの根拠をもって考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・1番と2番で違うところはどこだろう。 ・なぜ1番と2番では歌い方を変えてあるのだろう。 ・どのように歌ったら、作者の思いが表現できるだろう。(個人で考える。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・1番と同じ表現で2番を歌ってみるなど、具体的に操作して感じ方の違いを確かめ、作曲者の意図を想像させる。 ・どの要素をどのように歌ったらいいか一人一人に考えをもたせる。

第7時	曲の構成、強弱、音色を意識し、それらの要素を生かしてふさわしい表現を工夫することができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生きることの美しさが伝わるように、表現を工夫しよう。 ・ どのように歌ったら、作曲者の思いが表現できるだろう。(グループで追求する。) 強弱：強弱をしっかりつけて、表現しよう。 音色：歌声をそろえて、表現しよう。 ハーモニー： <ul style="list-style-type: none"> 音程を正しくとって、きれいなハーモニーを響かせよう。 ・ 工夫したことをグループ毎に発表しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時で、着目した要素ごとグループを作り練習する。
-----	---	--	--

※太枠が検証授業

イ、学習指導の様子

a) 曲に対する思いをもつ【検証の手だて(1)(2)】

「COSMOS」の曲と出会い、また作曲者がこの曲を作曲した背景の説明を読む中で、下記のようなメッセージが含まれていると読み取った。

<ul style="list-style-type: none"> ○人と人のつながり <ul style="list-style-type: none"> ・ 僕らは一つで、みんな地球に生まれたから、心はつながっている。 ・ 昔からずっとつながっている命。 ○一人一人の大切さ <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の中に流れている遺伝子を伝える役目がある。光の声は祖先の人たちが心の中で励ます声。自分は1人しかいない、自分の生まれてきたことを楽しもう。未来には宇宙のような可能性がある。 ・ 一人一人に価値がある。 ○平等 <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分もみんなも輝いているということ。 ○答えはどこかにある <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分がいったい何なのか、命を燃やしてじっくり考えればいいということ。 ○生き方 <ul style="list-style-type: none"> ・ 星空に比べれば自分たちはちっぽけ。星は小さいけど、とてもきれいに輝いている。僕たちも星のようにいっぱい輝いて生命を燃やそう。 ・ 一人一人が大切な存在でちゃんとした命。その生きられる間を思いっきり生きなさいということ。 ・ 君も頑張ればきっといいことがあるということを伝えたかった。 ・ 夢をあきらめないでという思い。

曲が表すメッセージを理解した上で、作曲者の意図を探求する。

子どもがとらえた作曲者の意図をまとめてみる。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 2番を弱く歌い出すことで、目立たせるようにしたかった。 ・ 作曲者の一番伝えたいところだから、特に、語りかけるように歌って欲しいから。 ・ だんだん人数が増えていくと、1番よりも強弱の差がついて、盛り上がるから。 ・ 心の中の声、思いだから <i>p</i>。「みんな～」と語りかけているから <i>mf</i> で歌い、思いが強くなっていくからクレッシェンド。
--

2番を**p**と**mf**で歌ってみることで、「**p**の方が自信がなさそうに聞こえる」「まだ、幸せじゃないみたい」と感じとった。また、ユニゾンと二部合唱で歌い比べ「人数が増えた方が強さが強調された」と感じ取るなど、具体的に歌い比べながら、聴こえた感じと曲に込められた思いを結び付け、自分なりに楽譜を読み取ることができた。

b) 思考・判断をする【手だて(1)(3)】

単元展開の第1時の中で、子どもたちは次のような思いをもった。

- ・やさしく強弱をつけて歌いたい。
- ・強弱をはっきりさせたい。
- ・強弱を付けるとより良くなる。
- ・優しい声で歌いたい。
- ・低音と高音のバランスが5：5になるように歌いたい。
- ・つられてしまわないように歌いたい。
- ・叫んでいるように歌うのではなくて優しい声で歌いたい。

そこで、今回はここに示された音楽を形づくっている要素の工夫を追求することにした。また、グループで追求させるのであるが、第1時でどの要素に着目していたかでグループを分けることにした。本時では、音楽を形づくっている要素（新学習指導要領の〔共通事項〕）のうち、強弱、音色、音と音の重なり（子どもたちはハーモニーと表現）の3つのグループで追求する。グループでは、前時に楽譜から読み取った作曲者の思いを効果的に表現するためには、音楽を形づくっている要素をどのように工夫したらいいか考え、各グループの目標とする表現を話し合い、グループ練習で追求した。

強弱のグループ

作曲者のいろいろな気持ちが伝わるように。

- ・最初の**p**は自分に言い聞かせるように歌う。
- ・分かったことをみんなに伝えるように**mf**。
- ・強弱、クレッシェンドを正確に。

音色グループ

星のように蛍のように、命を輝かすのだ。

- ・「時の流れ～なれるはず」をやさしくハモるところからふんわりと。
- ・伝えるように。
- ・答えが分かっているから自信満々に。
- ・やわらかい声から勢いのある声に。

ハーモニーグループ

考えの答えの違いを表現する。

- ・高音が伝えるように、低音が支えるように歌う。
- ・高音はしっかり歌詞を想像して、低音より大きめ。
- ・低音は強くなりすぎない、優しい感じ。

授業後の感想より

○自分のグループ練習で

- ・僕は低音だから初めは mf だから、遠くの人に内緒話をしている感じで、最後は f だからそこをしっかりと歌ったら上手くできた。
- ・ハーモニーを工夫して歌ってみて、前までは低音と高音がバラバラな感じだったけど、工夫してからは支え合おうとしてきれいに合わさった。
- ・地声ではなく、低音でも裏声で歌えた。(音色)
- ・音の大きさを示されている p などはできているけど、その中の強弱も出したいです。

○他のグループの発表を聴いた後歌ってみて

- ・音色、ハーモニー、強弱の良いところを合わせると、少しずつ気持ち(それぞれ違っていい)がこもってくるような気がした。続けて練習すればもっと作曲者が伝えたいことが分かり、やさしく強い歌がつかれると思う。
- ・音楽には、たくさんの工夫ができるということが分かりました。他のグループの工夫は私のグループの工夫とは少し違うので、合わせるとすごくきれいな歌声になるなど思いました。

子どもたちは自分たちで表現を工夫していくことで、音楽を形づくっている要素がいくつかあり、それを工夫することで思いを表現することができることに気付くとともに、よりよい表現を求めていきたいという意欲をもった。

ウ、考察

子どもたちは、強弱、音色、ハーモニーとそれぞれ共通の視点をもって表現を工夫した。これにより、工夫する要素が一本化され共通の課題をもって追求することができた。そして、一人一人が曲想にあった表現を求め、追求することができていた。これは、授業を観察して感じただけでなく、授業後に書いた子どもの感想からも、思いをもって追求していたことがわかる。

授業後の感想より

- ・同じハーモニーのことを工夫しようと考えている人たちと練習した。だから、アドバイスをする時、要点が絞れていてより良くしようと思えることができた。
- ・強弱のやり方で、歌の伝え方が変わることがわかった。

また、自分たちの発表を他のグループに聴いて感想を言い合う中で、自分たちでは気付かなかった変化や、もっと工夫したほうがいいところを感じ取ることができていた。そして、他のグループの発表を聴く中で、自分たちの追求した要素だけでなく、他の要素も工夫することで曲想を工夫することができることを知り、自分の表現にも取り入れていこうとする姿勢が見られた。

授業後の感想より

- ・自分たちで練習したことを発表し、他のチームの感想を聞くことで、「あっ、ここができたのか」や「ここができないのか」などと、しっかり自分を分かることができた。
- ・他のチームのよいところを見つけることができた。

子どもたちは一人一人が思いをもって追求し、少しの変化でも曲想を生かした表現に変わったと実感していた。これらのことから、本時の目標は達成することができたのではないかと考える。

目標が達成されたのは、曲をどのように表現したいかという思いを明確にもたせたためではないだろうか。そうであるならば、作曲者の意図を楽譜から読み取るに

あたり、具体で比較したことは適切な手だてであったといえるであろう。

また、グループ毎に音楽を形づくっている要素を一つに絞ったことで、より自分で判断(評価)したことを発言しやすくなっている。そして、他の人の判断(評価)を聞いた時も、理解がしやすかったようである。このことから、追求する要素を1つに絞ったことも適切な手だてであったといえる。

このように、思いをもって自分たちで表現を工夫していったことで、技術的なことへの追求が進んでいったことを見ていて感じた。であるならば、今の子どもたちでできる技術を目指しなれば、生徒は達成感を感じないまま終わってしまうのではないかという疑問が出てくる。

本時において、音色を追求するグループに授業者は「低音と高音の声質がそろえばいい」と目標設定していた。しかし、子どもたちは「柔らかい声から勢いのある声に途中で変えたい」という思いをもった。音色に柔らかい音色と勢いのある音色があることに気付いていることに驚いた。この音色の違いを小学校6年生が実際に表現するのはたいへん難しい。技術的に難しいことを子どもたちは目標としてしまっただが、子どもの感想にあったように、子どもなりに工夫して「表現できた」と感じていた。そのため、達成感を感じることができたのだと考える。そして、このような音色の違いを表現したいという思いをもったことは、「思いをもって追求する」という本時の目標が達成されたということであろう。だから、本時のようにどの音楽を形づくっている要素で、どのような表現にしたいか思いをもって試行錯誤(思考・判断の場面)させていったことは、目標達成のために有効な手だてであったと考える。

さらに、本時で音色の違いが表現しきれなかったと感じた子どもは、音色の違いに気付いたことのすばらしさを授業者によって認められたことで、次からも音色に気を付けて表現したいという思いをもつことができるのではないだろうか。そして、思うような音色を出すためにはどうしたらいいか学びたいという、技能を学ぶ意欲が生まれてくるように感じた。

③中学校2年生 ア、単元構成

時間	目 標	教 師 の 働 き か け	留 意 点
第1・2時	周りの音を聴きながら正しい音程で歌うことができる。	<ul style="list-style-type: none"> どんな曲か楽譜を見ながら聴いてみよう。 パート練習で自分のパートの旋律を歌えるようにしよう。 他のパートと合わせてみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 範唱を聴き、曲に対するイメージをもつ。 きれいなハーモニーを感じながら歌うようにする。
第3時	「COSMOS」のどの部分から、どんな思いが感じられるか、音楽を形づくっている要素や構造などの根拠をもって説明することができる。	<ul style="list-style-type: none"> 1番と2番で違うところはどこだろう。 なぜ、1番と2番では変えてあるのだろうか。 どのように歌ったら、作曲者の意図が伝わるだろうか。(個人で考える。) 	<ul style="list-style-type: none"> 1番と2番の旋律の違いが分かりやすいような自作の楽譜を提示する。 作者がこの曲に込めた思いを知り、楽譜を見ながら、楽譜にどんな意図が込められているか想像させる。

第4時	作曲者の意図を感じ取り、その思いを表現するために音楽を形づくっている要素に着目して、ふさわしい表現を工夫して歌うことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が輝く美しさが伝わるように、表現を工夫しよう。 ・パート毎どのように歌ったらいいか、自分の意見を出し合おう。 ・パート毎追求しよう。 ソプラノ：きれいなPを歌おう。 アルト：旋律がきれいにつながるように歌おう。 男声：力強さを感じるように歌おう。 ・工夫したことをパート毎に発表しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちのパートはどのように歌ったらよいか課題をもち、練習する。
第5時	楽曲全体を通して、ふさわしい表現を工夫して歌うことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時で工夫したことが生きるように、その他の所も工夫して歌ってみよう。 ・全パートで合わせて歌おう。 ・聴き役の人にアドバイスしてもらおう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各パートの工夫を理解し、全体の響きを感じながら歌う。

イ、学習指導の様子

a) 曲に対する思いをもつ【手だて(1)(2)】

「COSMOS」の作曲者の言葉と歌詞を読み、下記のようなメッセージを読み取った。

<p>○生き方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命を燃やせば（一生懸命頑張れば）誰もが輝ける。 ・君は一人じゃないよ。 ・みんな一生懸命努力すれば、ひとり残らず幸せになれるよ。 ・自分を見つめて。 ・思春期の悩みの答えを見つけて。 ・悩んでいく中で、自分を見つけていこう。 <p>○一人一人の大切さ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が輝いているんだ。 ・一人で悩まないで、自分にはたくさんの仲間がいるよ。 ・命の大切さ、無駄な命はない。 <p>○人と人のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・僕たちはかけがえのない存在。ずっと受けつがれてきた存在。

曲が表すメッセージを理解した上で、作曲者の意図を追求した。

生徒がとらえた作曲者の意図を示す。

<ul style="list-style-type: none"> ・やさしくした方が心に残って、伝えたいことがわかりやすい。 ・訴えたいことが違うから。 ・「幸せ」は優しく包む感じだから。 ・1番と2番の区別をつける。 ・後ろの伝えたい部分を強調するため。 ・2番の方が伝えたいことが大きいから。 ・みんなが協力して、という感じを出す。 ・2番のはじめは、耳を澄まして歌詞を聴いてほしい。 ・各パートの歌を聴いてほしいから。

- ・だんだん盛り上がるように、人数を増やしていく。
- ・最も伝えたいところを印象強くするため。
- ・いろんな思いが交わって悩んでいるから、少しずつパートを増やしている。
- ・全パート揃った時のインパクトが大きいから。
- ・パートの役割を目立たせる。
- ・テクスチュアが変わることで、より盛り上がっていく。
- ・少しでも違いをつけて、このうた全体をメッセージとして伝えたい。
- ・だんだん各パートを足すことで、全員の輝きが分かる。
- ・少人数の方が聴きやすい。
- ・音が重なって、きれいに響くことで、一番よりも強調した。
- ・落ち着いて心でゆっくり感じて欲しいから。
- ・自分の出した答えで大丈夫なのか、心配の気持ちもあるから。
- ・大切なところを、より強調させるためにテクスチュアを変えた。

1番はユニゾンで歌っていたのに、2番はソプラノだけの少人数で歌っていること、1番は全員で~~mp~~**p**で歌い始めるが、2番は少人数で**p**で歌い始めること、この2つの事実と歌詞、曲に込められたメッセージから、これだけの意図を読みとることができた。

b) 思考・判断をする【手だて(1)(3)】

音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚することを意識して、キーワードとして、強弱、音色、テクスチュア、速さ、リズム、言葉、パートの役割というカードを黒板に貼り、作曲者の意図を歌って伝えるにはどのように工夫したらいいか各自で意見をもたせた後、パート練習に入った。パート練習で歌う前に、まず自分の意見を出し合い、パートとしてどんな表現を目指すか共通の課題をもたせた。



ソプラノパート

きれいな**p**を歌おう

- ・やさしさ担当だから柔らかく歌う。(音色)
- ・わかりやすく言葉をはっきり伝えよう。(言葉)
- ・息をあわせる。
- ・強調させたいけど、きれいななめらかな声で。(強弱、音色)
- ・全体のハーモニーを聴きながら。ハーモニーを大事に。(音と音の重なり)

アルトパート

旋律がきれいにつながるように歌おう

- ・ソプラノの澄んだ声を消さないよう優しく上手にハモる。(音色・強弱)
- ・ソプラノより先に出るから、そこははっきり。ソプラノがその後しっかり入れるように。(パートの役割)
- ・息を続けるところは続けて、切らない。(フレーズ感)
- ・弱め。優しく。(強弱)

男声パート

力強さを感じるように歌おう

- ・他のパートの音を聴きながら歌う。
- ・「みんな」から強く。他のパートから気持ちをつなげる。(フレーズ感)
- ・男声が入ることで力強く感じるから、出だしの言葉をはっきりと。(パートの役割)
- ・「光の声」に向かってクレッシェンドし、思いを高める。(強弱)

生徒がこのような課題をもって、各パートを歌いながら自分たちの求める表現に近づくように思考・判断していった。そして、パート練習では、自分のパートの役割を理解するとともに、自分と違う表現方法と出会うことができた。

パート練習では、ソプラノは弱く歌ってみるが、「言葉をはっきりしてこない」と繰り返し歌っていた。アルトでは「ひとりのこらず」の「ひ」は私達だけで歌っているし、ソプラノもそれを聴いて入るから、はっきり言わないといけないと考え、リーダーが歌い出しが分かるように身振りを入れながら練習していた。男声パートは全員が揃ってはっきりと「み」ということで力強さが加わると考え、息をそろえ「み」と入る練習を繰り返した後、最後のクレッシェンドが効果的にきこえるように「ほたる」は少し弱めにして歌うことにし、「ほたる」がなかなか弱くならないと何度も練習していた。

授業の終わりに、本時の振り返りを行い、どの「要素」を「どのように歌う」ことによって「何が表現できたか」を書かせた。

- ・小さい声だけど、腹から声を出すことによって、語りかけているイメージを表現することができた。(音色)
- ・1パートだけで歌っているところの歌詞をはっきりと発音することで、語りかけているのが伝わった。(パートの役割)
- ・最初の部分を弱く歌うことで、他の部分に強さが生まれた。(強弱)
- ・口を大きく開け声を出すことで迫力があり、はっきり歌えた。(音色)
- ・歌い始めの言葉をしっかり発音し、音を潰さないように伸ばしている音を意識して歌ったら、言葉が伝わるようになった。(発音・音色)
- ・口を大きく開け、小さくではなく優しく柔らかく歌うようにしたら、響きが変わった。(音色)
- ・口を大きく開けて出だしをはっきり歌い、さらに弱く歌うと、優しく語りかけるように言葉もしっかり伝えることができた。(強弱、音色、発音)
- ・同じ旋律や言葉は、1回目を弱く、2回目を強く響く声で歌うことで、説得力のある歌い方になった。(強弱、音色)

このように生徒たちは、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じることができた。

ウ、考察

生徒たちは、それぞれのパートで作曲者の意図が聴く人に伝わるようにするために、どんな歌い方をしたらよいか考え、細かなところにも注目しながら練習を進めることができた。生徒たちは、今までの音楽経験を生かして、音楽を形づくっている要素をどのように工夫することでふさわしい表現になるか思考したのだと感じた。そして、それを同じパートで話し合う中で、一つの要素だけでなく他の要素との関係や、自分が気付いていなかった要素の工夫、着目点が違う意見などと出会い、よりふさわしい表現に近づいていくことができた。授業記録だけでなく、授業後の感

想からもそれが分かる。

授業後の感想より

- ・自分の意見が通り、自分の意見によって歌がよくなってよかった。
- ・優しく、強弱など意識するポイントは考え方によって違ったけど、みんな「生命」について大切に、輝くなどの意識はまとまった。
- ・ソプラノで声を響かせるように工夫し、優しく歌うようにしてみんな意見を出し合うことで、ソプラノの歌声がより美しくなっていくことを実感したこと。
- ・少し注意して歌うだけで、曲全体に流れや意味がでる。作曲者が伝えなかったことを私達が伝えるためには、伝えたいことに合う歌い方をしなければいけないと分かった。
- ・強弱や気持ちの込め方によってさまざまなことを伝えられることが分かった。
- ・いい意見がいっぱい出てきた。失敗でも、考えたことを実行するのが楽しかった。

授業の終わりに、全パートで合わせて歌ったが、どのパートも自分のパートの役割を意識しながら、他のパートをよく聴いて歌っている様子が伝わってきた。

- ・合わせると授業前とは何が違うのかも分かって、とても上手くなった気がした。
- ・最初に合わせたときよりも、授業でいろいろ学んだことが歌っていて生かされていたので、変化を見つけるのが楽しかった。

このような感想からも、本時の目標は中学校2年生にとって適切な設定であったと考える。

本時の目標が達成された要因として、曲の心情や情景を表現する体験を、小学校1年生から繰り返し行い、どんな表現の工夫をすることで何を表現できたか、それぞれの生徒が実感を伴って理解してきたものを出し合い、新しい表現に出会ったり、同じ意見に出会ったりする中で、より深く、よりふさわしい表現を工夫することができたからだと考える。そうであれば、技能を身に付けさせることに力点を置いた授業より、本時のようにどのように表現したいか思いをもち、自分たちでよりふさわしい表現を求め試行錯誤（思考・判断）する場面を設定することは、「適時性」のある目標設定であったということになる。新学習指導要領に『「曲にふさわしい」とは、多くの人が共通に感じ取れるような、楽曲固有のよさや特徴のとらえ方を意味している。』（中学校学習指導要領解説 音楽編 p43）とあるが、本時のような授業を中学校でも多く取り入れていくと、新学習指導要領中学校第2・3学年の内容、A表現（1）ア「曲にふさわしい表現を工夫して歌うこと」ができるようになっていくのではないかと感じた。そして、自分の体験から得た感性と友達の感性を融合させていくことができ、一人一人の感性はより深まっていくのだろう。

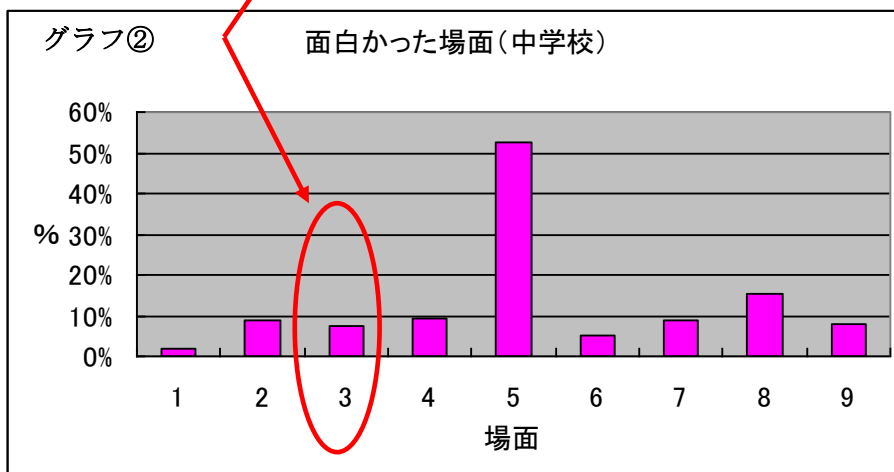
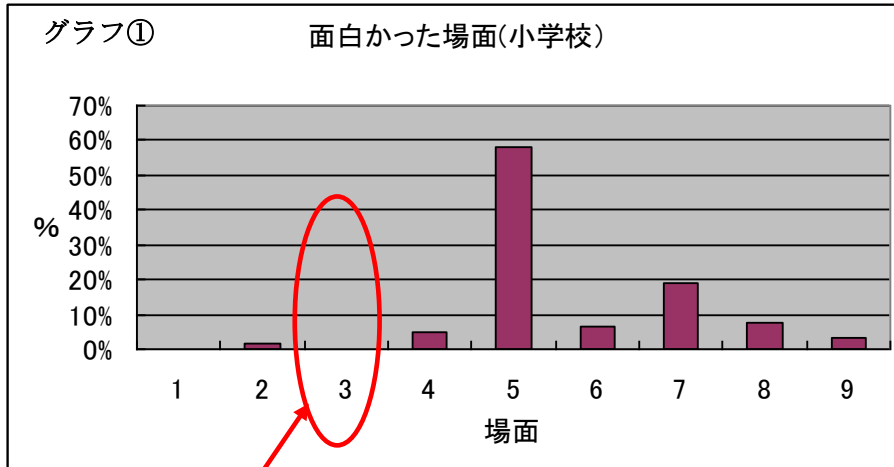
試行錯誤の場面としては、「COSMOS」を小学校6年生で行ったときと違って、グループ活動をパート別にすることで、それぞれの役割を自然に理解して練習することができた。グループの作り方は目標によって変わってくるが、本時の目標においてはパート練習にしたことは有効であったのではないだろうか。これも目標と同様、発達段階に合わせて工夫していくことが必要であると感じた。また、グループ練習も経験の一つで、どのように練習を進めていったらよいか理解できていたら、もっともっと思考は深まっていたように感じる。そのためにも、このようなグループ練習を繰り返して行っていくことも、より感性を高めるためには必要であると感じた。

6、授業後の生徒アンケート結果

音楽教育では「音楽を愛好する心情を育てる」ことは大きな目標である。音楽を愛好する中で、音楽に対する感性の高まりが見られるのではないかと考えた。そこで、生徒の興味関心がどのように高まったか調べたいと思い、授業後アンケートを実施した。

(1) 授業で面白いと感じた場面と内容

①授業の中で面白いと感じた場面

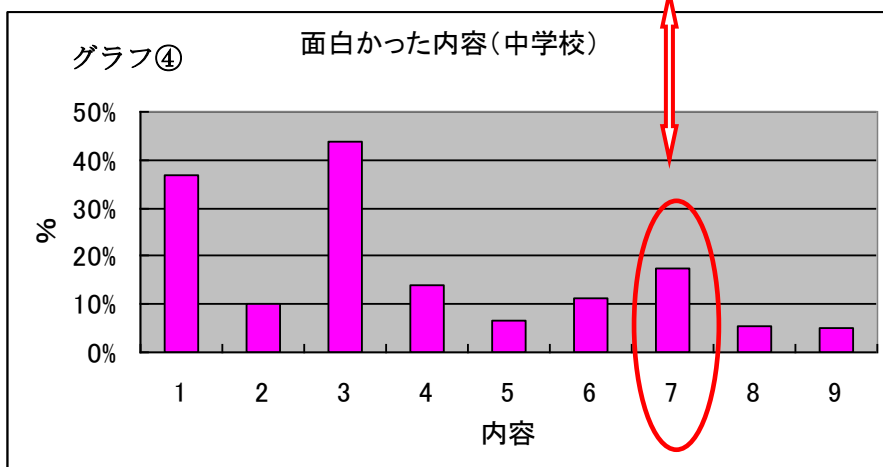
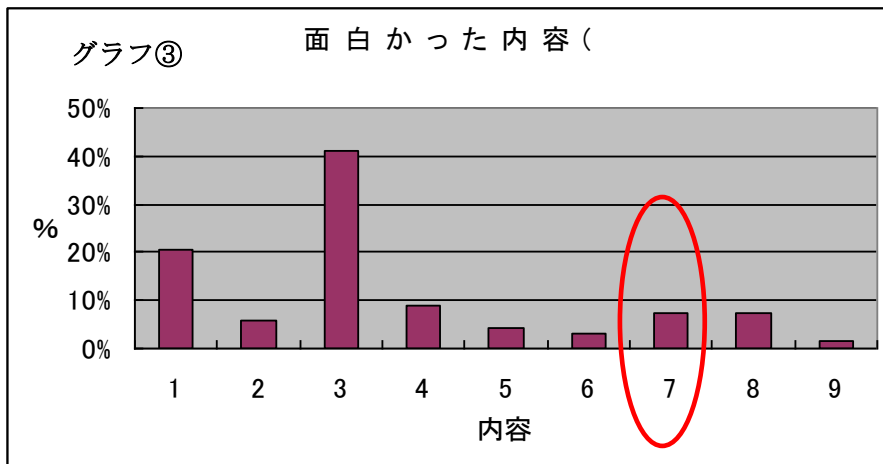


面白かった場面を分類してみた。グラフ①は小学生が面白かったと答えた場面、グラフ②は中学生が面白かったと答えた場面进行分类したグラフである。小学校も中学校もグループ練習・パート練習の場面が圧倒的に多かった。また、中学校では小学校に比べ、曲のメッセージを考えたり、作曲者の意図を想像したりした場面で、生徒が曲から感じ取ったものの価値を自らの感性によって確認することができた場面である。これを面白いと感じている生徒が小学校よりも多かったということは、中学校では、歌詞の内容や曲想を味わう場面を設定することで、自分の思いを表現したいという意欲を、さらに引き出すことができる可能性があることが実証されたのだと考えている。

場面

- 1:最初に歌った歌
- 2:曲のメッセージを考えた
- 3:作曲者の意図を考えた
- 4:どう歌ったらいいか考えた
- 5:グループ練習・パート練習
- 6:意見交換の場
- 7:各パートでの発表
- 8:最後の合唱
- 9:その他

②面白いと感じた内容



面白いと感じた内容も分類した。グラフ③は小学生が面白かったと答えた内容、グラフ④は中学生が面白かったと答えた内容を分類したグラフである。グループ活動（パート練習）を通して、自分たちの歌が変わったと感じたとか、自分が表現したかったものに近づいたと感じたなど、達成感を感じたときに、小学校でも中学校でも面白いと感じている。また、小学校でも中学校でも一番高い値だったのは試行錯誤する(自分で考える)ことであった。これから、どのように歌いたいという思いをもち、音楽を形づくっている要素の働きなどをいろいろと考えながら音楽表現を試し（思考する）、もっとこのように歌ったほうがいいのではないかと思いをもち（判断する）、ことが面白いと感じると分かった。

また、中学校では課題や目標をもって歌うこと、何を表現したいのか考えて歌うことを面白かったと答えた生徒が多いことから、曲を味わいどのように表現したいか思いをもたせる場面の設定は中学校だからこそ大切であることが分かった。

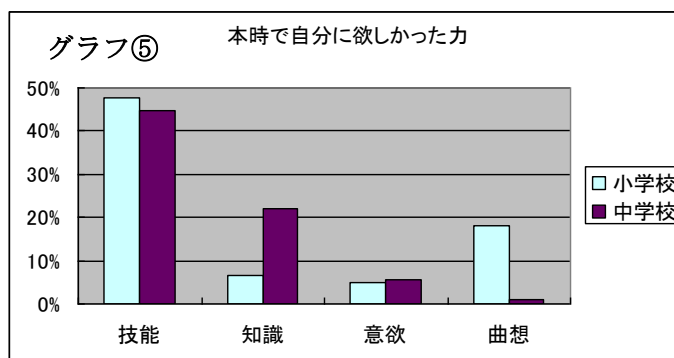
以上のことから、「思考・判断し表現する」授業は、9年間続けていく必要があることが分かった。

内容

- 1：達成感、変化を感じた、上手になった
- 2：他の人の意見を聞く
- 3：試行錯誤する（自分で考える）
- 4：他のパートを聴く（知る）
パートの役割を感じる（中学）
- 5：音の重なりを感じて
- 6：作曲者の思いを想像する
- 7：課題目標をもって歌う、何を表現したいのか考えて歌う
- 8：歌うことそのもの

(2) 本時に必要だった力や知識

音楽指導の適時性を考えたとき、本時において「もっとこんな力がついていたら」と感じることがあるとすれば、それが今の学年までに身につけておかなければならなかった力ではないかと考え、授業後に聞いて、4つのグループに分類し、グラフ⑤に示した。



注目したのは、小学校でも中学校でも技能面のことを書いた生徒が多かったことである。グラフを見た時には、口のあけ方や発声の仕方、強弱の歌い方などの技能面を、小学校から積み重ねていくことが大切なのではないかと読み取った。しかし、生徒たちが実際に書いた文章を読むと、そうではないことがわかる。

小学校

- ・もっと強弱をはっきりさせられるようになれば上手にいくと思った。
- ・もうちょっと高い声がきれいにいせたらいいなと思う。
- ・絶対音感を持っていたら音が外れなかったのに。
- ・**P**の出し方、クレッシェンドの付け方が分かっていたら。

中学校

- ・弱くすると声が小さくなりすぎたり、音程も意識しすぎると外れたりする。もっと音がとれ、腹筋を上手に使えたらよかった。
- ・高い音と低い音の切り替えが上手にできるようになりたい。
- ・低く小さい声でもしっかり響くために、どうすればいいか知りたい。
- ・もう少し声を響かせ、音は弱くてもはっきり歌えることができる技能を身に付けたい。

このように、生徒たちは思いをもって自分たちで思考・判断する活動を通して、「技能を身に付けたい」という意欲が生まれてきていたことに気付いた。

7、研究のまとめ

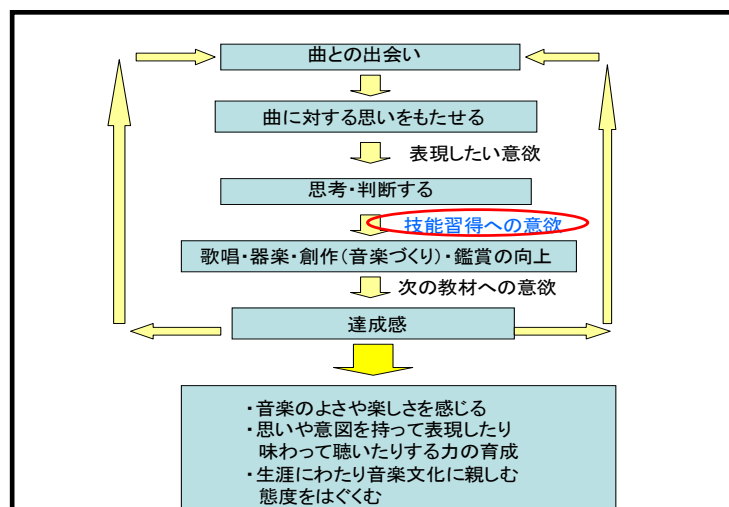
本研究では、音楽指導の「適時性」と「連続性」を視点に、音楽指導の在り方を探ってきた。発達段階にあった目標と目標達成のための手だて（「適時性」）で「思考・判断し表現する」（「連続性」）場面のある授業を行うと、どのような効果がみられるのか検証授業を行った。検証授業では、5（2）で示したように、子どもたちはどのように表現したいかという意図をもって、表現活動を行っていた。これまでも自分たちの思いを音楽で表現できるように追求する授業を行ったことはあったが、それによって子どもたちの内面にどのような変化があったかまでは分からなかった。しかし、本研究を通して検証授業を分析することにより、「それぞれの学年にふさわしい目標」を設定で、思いをもたせ思考・判断し表現する活動が、音楽に対する意欲を高め、音楽を愛好する心情を育てていくことができてきた。発達段階にあわせた目標による授業によって、子どもたちは自分たちで考えていくことを面白いと感じていることから、やはり「適時性」のある目標を設定することで、音楽に対する意欲は高まっていくことが実証できたと考える。

本研究では、新学習指導要領がめざす発達段階による文言の違いも、子どもの実態を通して理解できた。例えば、中学校2年生の授業の中で、歌詞にある「ひとりのこらず」の

「ら」の響きだけが変わってしまうから、どうしたら変わらず歌えるかわからず、「ら」が納得いかないと繰り返し歌っている場面があった。小学校6年生のグループ活動と同じような活動であったが、中学生は小学生よりもより細かなところにも気付くとともに、深く追求することができる子どもの実態で確認することができた。そして、これが学習の深化であると感じた。これを、新学習指導要領で説明すると、小学校〔共通事項〕ア「音楽を形づくっている要素のうちの次の(ア)及び(イ)を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。」という表記が、中学校〔共通事項〕ア「音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受すること。」と変わるように、中学生は、いくつかの音楽を形づくっている要素の関連を意味づけすることができるし、それによって何を表現できたかも受け止めることができるのである。だから、それを踏まえて中学校学習指導要領の内容、第2・3学年、表現(1)ア「歌詞の内容や曲想を味わい、曲にふさわしい表現を工夫して歌うこと。」を目指していくのだといえる。

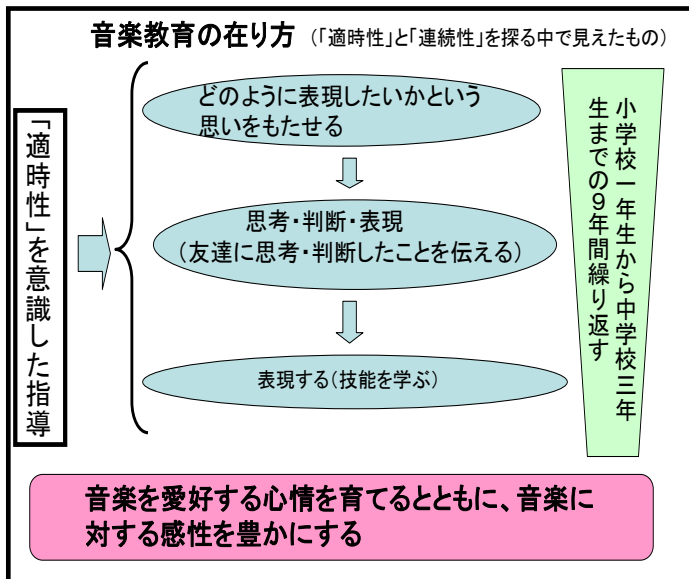
また、中学校第2・3学年の〔共通事項〕の解説に「〔共通事項〕の示し方は第1学年と同じであるが、第2学年及び第3学年においては、学習の深化を図るように配慮することが大切である。」(中学校学習指導要領解説 音楽編 p54)とあり、これは、音楽指導の「連続性」の中で、その深化を図るということ分かった。本研究において、小学校6年生と中学校2年生で同じようにグループ活動を行ったが、実際に小学校6年生よりも中学校2年生の方が、強弱・音色などをどのようにしたか説明することができるだけでなく、それによってどんなことが表現できたかを感じ取ることができた。本研究では同じ生徒の小学校6年時と中学校2年時を比較したわけではないが結果を見る限り、学習指導要領、中学校〔共通事項〕ア「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受すること。」ができるようになっていくのは、小学校において強弱・音色などを工夫し、自分にとってより良い表現に出会う学習を積み重ねてきたからだと考える。これが、上記中学校第2・3学年の〔共通事項〕の解説が示す「学習の深化を図る」ことだと考える。だからこそ、新学習指導要領が示す「思考・判断し表現する」活動、静岡市の課題である「言葉などを用いて表す主体的な活動」を授業の中で取り入れていくことが、音楽指導に欠かせないものとなり、これによって「音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにする」のだと考えるのである。

授業後のアンケートの「面白かった場面」と「面白かった内容」では、小学校も中学校も全く同じ場面と内容を答えた生徒が一番多かった。それは、少人数で試行錯誤していく場面である。ここを充実させるためには、「どのように表現したいか」という思いをしっかりともたせることが大切であった。「どのように表現したいか」という思いをもって、友達とかかわりあいなが



ら、表現を深めていくことによって、アンケート「②本時で必要だった力や知識」に書かれていたように、生徒自ら技能を習得したくなることが分かった。この意欲をもったとき、教師が生徒の欲している表現に必要な技能を教えたら、それは生徒の実感を伴って定着し

ていくのではないだろうか。このように、思いをもたせて、「思考・判断し表現する」この一連の過程を繰り返すことは、何よりも子ども自らが技能を学びたいという意欲をもつ過程だからこそ、重要なのだということが分かった。



本研究を通して、音楽指導は「どのように表現したいか」という思いをもたせ、「思考・判断」し友達にそれを伝え、「音楽で表現する」活動を、小学校1年生から中学校3年生までの9年間続けていくと共に、この一連の過程の中で適時性を意識した目標や手だてで指導を行っていくことが大切だと感じた。これによって、中学校音楽科の目標「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化につ

いての理解を深め、豊かな情操を養う。」を達成することができるのであろう。

本研究は1年で行ったものであり、同一の子どもの成長を追うことはできなかったが、それぞれの子どもの発言や様子から、音楽指導の在り方を考えてみた。義務教育9年間の学びを保証するという観点からも、このような「適時性」と「連続性」を考慮して、それぞれの学年にふさわしい目標で、「思考・判断し表現する」授業実践を積み重ねていきたい。

※1) 参考文献一覧

- ・小学校学習指導要領解説 音楽編 (文部科学省)
- ・中学校学習指導要領解説 音楽編 (文部科学省)
- ・平成20年1月 中央教育審議会答申
- ・小学校 新学習指導要領の展開 音楽科編 明治図書
- ・中学校 新学習指導要領の展開 音楽科編 明治図書
- ・音楽教育の系統性に関する提言
～新入生から卒業生になる8年～ 伊東玲 著 レーヴック
- ・初等教育資料 2010年4月号～2010年12月号 (文部科学省)
- ・中等教育資料 平成22年4月号～平成22年12月号 (文部科学省)